

## 赤い土器と黒い土器

現在、私たちが使っている焼き物は、さまざまな色が付けられています。これは色が出るように釉薬を掛けて焼いたためです。日本では奈良時代の三彩陶器や、古墳時代終末の緑釉陶器が、釉薬を掛けた焼き物の始まりですが、それより古い時代に、赤や黒い色を付けた土器が作られました。

市内の遺跡から発見された赤い土器と黒い土器

縄文時代初めごろから行われていました。赤色の顔料は、ベンガラと呼ばれる赤い粘土や鉱物を粉末にしたものが使われ、縄文時代の終わりごろには、鉱物から採れる水銀朱も使われるようになります。発色は水銀朱の方が鮮やかですが、ベンガラは入手が容易で使い易いことから、その後も多く用いられました。ベンガラは直接土器に塗るよりも、粘土に混ぜて土器の表面に薄く塗り、磨いてから焼くと発色が良くなるようです。黒い土器は赤に比べると少なく、顔料は煤などを利用しています。また、漆に赤や黒の顔料を混ぜて、色を付けることも行われました。福井県や山形県などで、約5500年前の漆塗りの縄文土器が発見されています。漆塗りの技術は、この頃に普及したようです。このほかに、顔料は使いませんが、鉄分の多い粘土で土器を作って、赤く発色させる方法も見られます。

市内の遺跡からも、赤や黒の土器が発見されています。縄文時代では、ベンガラが塗られた縄文土器や、上高津貝塚、摩利山新田の宮前遺跡からはベンガラを粉末にした石器が出土しました。おもしろい例として、中村東の峰崎C遺跡から、摺印のような縄文人の指紋がついた土器が発見されています。

弥生時代も全国的にみると赤い土器が多くみられますが、土浦市周辺で作られた弥生土器にはあまり見られません。

古墳時代になると、市内でも赤い土器が多くなりま

す。古墳時代初めの3世紀終わりから4世紀前半は、食べ物を盛り付ける高杯、小形の壺やその壺を載せる器台の多くが赤く塗られています。

また、大きな壺にも赤く塗られたものがみられます。

その後、赤い土器は減少しますが、5世紀後半から6世紀前半には、高杯や椀、杯などが、赤く塗られるようになります。

6世紀後半になると、赤い土器は高杯以外ほとんどみられなくなり、代わって黒い土器が出現します。黒い土器は杯に多く、内面と外面を黒く色付けします。黒い色を付けるには、土器が焼きあがった後、急激に冷やして炭素を吸着させる方法や、漆を塗って黒くする方法があります。市内で発見されている黒い土器は、両方用いられているようです。この黒い土器も、7世紀中ごろから作られなくなります。

再び黒い土器が出現するのは、平安時代になってからで、杯や皿の内面に炭素を吸着させて黒くします。内面が黒いので内黒土器と呼ばれています。土器に色を付ける理由について、特に赤い色は祭祀的な意味が考えられています。古墳時代や平安時代の黒い土器については、祭祀的な説と、水漏れを防ぐためなどの説があります。

今回紹介した土器は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて5月末まで展示します。ぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場（☎826・7111）



ベンガラを粉にした石器と赤い土器

